

Title	フランスに渡った邦人庭師：畑和助の軌跡(下)
Sub Title	Un jardinier japonais en France : sur les traces de Hata Wasuke (seconde et dernière partie)
Author	鈴木, 順二(Suzuki, Junji)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2011
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.52 (2011. 3) ,p.53- 82
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20110318-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フランスに渡った邦人庭師

—— 畑 和助の軌跡（下）

鈴木 順 二

1889年のパリ万国博覧会で、日本の園芸展示をするために雇われ渡仏した庭師・畑^{はたわすけ}和助。万博閉幕後もフランスにとどまった畑が、その後数年間どのように仕事を続けていたのかを見てきた。万博の園芸展示会場でロベール・ド・モンテスキウに見出された畑が、盆栽の手入れや日本庭園の築庭に携わったのは、パリ市内（モンテスキウ邸）と近郊のブワ＝ブドラン（グレフル伯爵夫人の庭園）、ヴェルサーユ（モンテスキウ邸）、ロージュ＝アン＝ジョザス（ユーク・クラフトの「緑の里」）だった。1890年代半ばまでのことと考えられる。ではその後、畑はどのような仕事をして、どのような人生を歩んだのだろうか？

先に見たように、モンテスキウはハタの処遇についてこのように書いていた。「[ハタ・ワスケには] 素晴らしい境遇を保証してやることができた。ブローニュにいるエドモン・ド・ロッチルドのところに入れてやったのである。ロッチルドはこの男の腕を高く買い、会うたびに私の地^{グノム}の精を贈ったことに礼を述べてくれるのである。¹⁾」どうやらモンテスキウは、畑をエドモン・ド・ロッチルドに斡旋したらしい。確かに、フランス国立図書館草稿部所蔵の「モンテスキウ文書」のなかには、この記述に対応するエドモン・ド・ロッチルドからの礼状が残されている。「フォブール・サントノレ 41 番地」というエドモン男爵のパリ市内の住所が印刷された用箋には、このように手書きされている。「ご親切なお手紙をありがとうございます。また、あの

熟達した庭師をわざわざ探してくださって、ありがとうございました。私どものところで、日本のミニチュア庭園を作れる腕前をもっています。²⁾」手紙に男爵の署名はあるが、日付は記されていない。そのため、畑がいつエドモン男爵に雇われたのか、明確にすることはできない。1890年代後半から1900年頃のことだったと推定される。

モンテスキウが、「ブローニュにいるエドモン・ド・ロッチルドのところ」と書いていたのは、エドモン男爵がブローニュ＝シュル＝セヌ市にもっていた30ヘクタール（約9万坪）の土地で、畑が日本庭園を作ったからだ。同市は、パリの西でセヌ河が大きく蛇行しているところに位置している。そのため、東、南、西の三方をセヌ河に囲まれ、北にはブローニュの森が広がっている。エドモン男爵のこの広大な所有地は、市の北西端にあった。北側の境界となっている道を越えればブローニュの森のはずれのロンシャン競馬場で、西側にはセヌ河が流れている。地所は東西に長い台形で、ほぼ平坦だった。その中央やや東寄りに、19世紀半ばに建てられた三層の城館がそびえる。城館の北側は噴水を備えた見事な整形式のフランス庭園だったが、ずっと広い西側は自然景観を重んじるイギリス庭園で、大きな池も広がっていた。このイギリス庭園の一部に、日本庭園が造られることになる。

ここで、畑がロッチルド邸で働いていたことを含めて、その経歴が端的にわかる資料を見ておきたい。それは東京の外交史料館に保管されている。邦人に関する事務処理のためにヨーロッパにある在外公館と東京の外務省との間で交わされた通信文をまとめた『在外邦人身分関係雑纂歐洲ノ部』第12巻に収められている。昭和13年（1938年）2月15日に在仏大使の杉村陽太郎が外務大臣廣田弘毅にあてた次のような書信だ。

神奈川縣人畑和助死亡ニ関スル件

元本籍地神奈川縣橋郡生尾村鶴見一〇一〇

庭師 畑 和助

慶應元年六月十日生

右者明治廿二年三月廿三日馬耳塞着來佛シタルモノニテ其後當地富

豪「ロッチルド」家ノ庭師ニ傭ハレ居リ明治四十四年三月廿一日「セーヌ」縣「ブーロンギユ、ビランクール」町役場ニ於テ佛蘭西人 Le^{ルー}
^{キエマン}Quement ト婚姻ヲ爲シタルモ當館ニ何等正規ノ手續ヲ爲ササリシモノ
 ニテ昭和三年八月廿八日死亡シタルママ今日ニ至リ前記「ルー、キエマン」ヨリ畑和助遺産相續ノ爲当館ニ証明書下附方願出テタルニ付取調ヘタルニ前記ノ次第判明シタルニ付遺留品等提示方要求シタルモ旅券其他本人ノ身許ヲ知ルニ足ルモノナク只本人ヨリ当館ニ届出テタル大正九年十月十六日提出ノ在留届ニ依リ前記元本籍地判明シタルニ過キス
 仍テ「セーヌ」縣「ブーロンギユ、ビランクール」町役場發給ニ係ル畑和助死亡證明書ヲ提出セシメ別添送付ス
 本人本籍地ニ轉達方御取計ノ上可然處理セシメラレ度尚前記「ルー、キエマン」ニ対シ証明書下附ノ必要有之ニ付畑和助ニ対スル戸籍謄本一通至急送付方御配慮相煩度此段御依頼申進ス

神奈川縣橘郡生尾村鶴見 1010 の畑和助といえは、本論で先に示した旅券發給記録『海外旅券勘合簿神奈川縣之部』にでてきた神奈川縣橘郡鶴見村千拾番地の畑和助と同一人物ではないのか？上の書簡によれば、畑和助（慶応元年・1865年生）は明治22年（1889年）3月に来仏し（23歳）、その後「ロッチルド」家に庭師として雇われた。明治44年（1911年）3月に、畑は「セーヌ縣」の「ブーロンギユ、ビランクール」（Boulogne-Billancourt ブローニュ＝ビヤンクール。ブローニュ＝シュル＝セーヌから1925年に改称）でフランス人と結婚したが、そのことを日本大使館には届けていなかった。大正9年（1920年）10月に大使館に在留届を出した後、昭和3年（1928年）8月に死去した（63歳）。この時、未亡人は大使館に届け出ず、10年後のこの度、畑の遺産を相続するため大使館に証明書類の交付を願い出て、事の次第が明らかになった、というものだ。氏名と本籍はもとより、1889年に渡仏しロッチルド家お抱えの庭師だったという事実も、これまで本論で示した畑の履歴と完全に一致する。モンテスキウが絶賛しエドモン・ド・ロッチルドに紹介した Hata Wasuké は、間違いなくこの書簡にある畑和助だ。

ブローニュ＝ビヤンクール市には、確かに畑の婚姻証書（1911年3月21日）と死亡の翌日に書かれた死亡証書（1928年8月29日）が保管されており、上掲の大使の書簡の内容が確認できる。婚姻証書によると、45歳の畑の職業は庭師。住所はブローニュ＝シュル＝セヌ市フェサル街57番地。結婚相手はセヌ＝エ＝マルヌ県クールパレ村出身のベルト・ル＝ケマン（29歳、無職）で、同じくフェサル街57番地に居住。結婚の立会人は以下の4名。ヴィクトール・ショヴァン（68歳、庭師長、同市トランスヴァアル街2番地、新郎の友人）、キチロ・フジワラ（42歳、弁護士、同市ストラスブール通り14番地、新郎の友人³⁾）、マリ・ルケマン＝パスケ（25歳、無職、同市ラ・レヌ通り128番地、新婦の妹）、ルウィーズ・グユー（45歳、無職、同市ストラスブール通り14番地、新婦の友人）。証書の末尾に結婚した両名と立会人、それに助役の合わせて7名がローマ字で署名している。結婚に際して夫婦財産契約は結んでいない。なお、2人の間に子供はなかった。一方、死亡証書によると、畑は1928年（昭和3年）8月28日に同市サン＝クルー街82番地（当時は病院があった）で死去した。市役所に届け出をしたのは未亡人ではなく、同所の監視だった。死亡したときの住所は、同市レスト街52番地⁴⁾。このことから、一旦エドモン男爵に雇われた後は、畑は仕事を变えず、ずっとブローニュで働いていたと推測される。

では、エドモン男爵のもとで、畑はどのような仕事をしていたのだろうか？「富豪」ロッチルドの屋敷、しかも30年近くにわたって畑が手入れしていたとすれば、相当優れた庭園に仕上がっていたと推測される。しかし私有地内のことであり、100年余りも歳月が流れているので、参照できる資料は極めて限られてしまう。

比較的早い時期にこの日本庭園に言及した文献としては、パリの国立自然誌博物館の庭師長だったジェロームの書いた訪問記がある。1904年に全国順化協会の機関誌に掲載された。この記事のなかで、筆者はブローニュのロッチルド邸の庭の一部が日本庭園になっていて、ボタン、ユリ、アヤメ、ナデシコ、アジサイなど多様な日本産の植物が育っていることを紹介している。ジェロームによれば、この日本庭園の全体像は庭師長のショヴァンが描き、

植栽は日本人庭師の畑が担っていた。一行が見学したときには、盆栽の育て方について畑が自ら説明したという⁵⁾。記事には写真や図はない。この訪問記が掲載された 1904 年の時点で、日本庭園にはすでに相当な種類の日本産植物が育っていた様子だ。従って、畑がここで働き始めたのは、それより数年は遡ると考えられる。

ロベール・ド・モンテスキウも回想録でブローニュの日本庭園に触れている。モンテスキウは 1921 年に他界したので、恐らく 1910 年代の情景を描いたものと思われる。少し引用しよう。

この素晴らしい〔ブローニュにあるロッチルドの〕大邸宅の広大な芝地に畑が整えた極東の植付けほど、創意に富んだものはない。竹の小橋、石か磁器の灯籠、莫藎の敷かれた亭などを色鮮やかに描いた、まるで生きた絨毯を広げたかのようだ。それらを取り囲むようにアヤメ、アジサイ、それにカケモノ掛け物やキモノ和服、座布団やフクサ袱紗に見られる草木が、ひとつ残らず普段から花を咲かせている。畑は、うねるような枝ぶりのサワラや、扇形の葉をつけるイチヨウも日本から取り寄せて我が国に移植し、しかもそれに相応しい鳥獣と組み合わせて完璧な景観を作り上げている。たとえば、専用の鳥小屋で畑が一羽の雄鶏を世話しているのを私は見たことがある。それは驚嘆するほど見事な鶏、だが不幸せな鶏だった。というのは、尾羽の長さが何メートルもあるので、想像を絶するそのトレーン裳裾を痛めないように、止まり木の上で餌を食べて育たなければならなかったからだ。畑は天分に恵まれた庭師だと思う。⁶⁾

このようにモンテスキウは、畑が何年間も手塩にかけて作り上げた庭園を称賛してやまない。畑は実にさまざまな植物を日本から取り寄せて巧みに組み合わせ、美事に植えつけていたようだ。また、随所に竹の橋、石灯籠、亭などを配して日本らしさを醸しだし、草木のみならず尾長鶏のような日本特有の生きものまで育てていたという。エドモン男爵の期待に畑が見事に応え、非常に広い意味での庭園造り全般にわたって思う存分腕前を発揮していたこ

とがうかがえる。

第一次世界大戦後の 1920 年代のことになるが、このころの畑の仕事ぶりを詳しく伝えてくれるのは、マルセル・ゴシェ（1906–2006）という元庭師だ。ゴシェは約 17 年間イギリスとフランスのロッチルド家の庭園で働き、1930 年代には庭師監督としてブローニュで大勢の庭師を指揮した経歴を持っている。退職後の 1970 年代になってからロッチルド家での思い出を書き綴り、1982 年に『庭向きのロッチルド』と題して自費出版した。この本はその後 2 回版を改めて公刊されている。本書に書かれているのは、やはりロッチルド家で庭師を務めた父親アルベールの思い出と、ロンドン・ロスチャイルド家が所有していたワドスドン（イギリス）、エドモン男爵が所有していたアルマンヴィリエ（セーヌ＝エ＝マルヌ県）、そしてブローニュという 3 つの庭園での長年にわたる庭師としての自身の体験だ。半世紀余りも昔のことを回想して、ゴシェはブローニュの庭園のさまざまな思い出を語っている。たとえば、季節ごとに草花を植え替えたり果物や生花を育てるために、庭師が常時 60 人も働いていたこと。フランス庭園だけでも毎年 4 万株のゼラニウムが必要で、そのために挿し穂を毎年 10 万本も用意したこと。屋敷から離れたところに温室があり、冬には暖地性の多くの植物が収容されたこと。そのなかには、重さが 3～4 トンにもなるヤシやオレンジの木が 10 数本あったこと。春になると 1 本ずつ特別の台車に乗せて 4 頭の馬が曳き、公道を通って城館前庭まで運んだこと。果物好きのエドモン男爵のために、暖房設備を備えた温室でサクランボ、モモ、ネクタリン、ブドウ、イチゴをミツバチに受粉させて栽培し、サクランボは 4 月初旬には熟した実を収穫したこと。盛大な晩餐会の折には、そうしたサクランボの木を鉢ごと食堂に運び入れ、客たちが手ずから実を摘んでデザートとしたこと — このように、いかにもロッチルドに相応しい、スケールの大きな話にこと欠かない。そして、ゴシェが「庭園の至宝のひとつ」と呼ぶ日本庭園の話には、4 ページ余りが割かれている。その要点をまとめてみよう。

1924 年にマルセルの父親がブローニュの庭師監督に就いたとき、エ

ドモン男爵はこのように忠告した。「畑とは外交官のようにつき合うのだよ。あれは、ずっと《日本》で自分の気まぐれにまかせて仕事をしてきたから、人に指図されるのは受けつけない。かれこれ25年もあそこにいるから、あの男の庭師としての並外れた腕前は、お前さんにもすぐに分かるだろうが。」マルセル自身が初めて畑に会ったのは1925年のことだった。背が低くずんぐりとして、畑の外見は魅力的とはいい難かった。フランス語は下手で、片言で意思を伝えていた。結局、畑は死ぬまで一度も日本に帰らなかった。

日本庭園は広さが1ヘクタールほどあった。池を見下ろす高台が2か所あり、頂には二層の塔と透かし彫りの引き戸のある茶室が建っていた。どちらも器用な畑がこしらえたもので、この他にも庭門や人工の流れにかかる橋は、みな畑が作ったものだった。エドモン男爵は特に茶室でくつろぐのを好んでいた。優美な曲線を描く小径をたどると、あらゆる角度から庭の景色を楽しむことができた。ヨーロッパでふつう見かけられるような植物はことごとく排除され、樹木は理想的な形と大きさを保つように整枝されていた。5、6月に、水辺のスイレンや彩り豊かなアヤメ、茶室にからまるフジ、多品種のツツジ、アジサイ、ユリが咲きそろうと、さながらエデンの園を思わせる美しさだった。草花では多彩なボタンやキクなど、樹では驚くほど多種類の針葉樹と珍しいイワナシ、フウ、イチチョウ、カナメモチ、ブナ、それにウメ、サクラ、リンゴなどが絶妙に調和していた。竹林の前には盆栽の名品が並んでいた。

畑は手先が器用で、専門の職人が使うような道具一式を用いて、樹木を素材に創意豊かな作品も作り上げた。曲がりくねった木の枝に蛇を彫刻したり、木の根を削って龍を彫ったりした。また畑は、わずかな草木を使ってすばらしい飾りをこしらえることができた。新年に男爵が友人たちに贈る品のうちでも、畑が作ったものは特に珍重されていた。しかしインスピレーションが湧かなかったり、興がのらないと、畑は適当に仕上げてしまうこともあった。あるとき男爵が不満を言うと、畑は、「男爵さま、いつももっと立派なものほしい。ぜったい満足ない。私も

う作らない。私出ていく！」と口答えして行ってしまった。しかし翌日には畑は普段と変わらずやって来て、また仕事をしていた。⁷⁾

ゴシェは畑が片言のフランス語しか話せなかったと書いている。これは作家のエドモン・ド・ゴンクールがモンテスキウから聞いた話として、1895年8月15日の『日記』で紹介していたことと一致する。何十年もフランスで暮らし、フランス人を娶いながら、畑のフランス語はあまり上達しなかったようだ。庭門や橋のみならず塔や茶室も畑が作ったという話は、恐らく聞き伝えて、ゴシェが実際に見たことではないかもしれない。ともあれ、築山のある3,000坪余りの回遊式庭園には、池、遣水、塔、茶室、庭門、橋などが作られ、日本産の草木が実にふんだんに植えられていたことがわかる。

2000年に刊行された版には、ブローニュの日本庭園を撮った写真が1点収められている(図1)。手前右側に雪見灯笼が置かれ、左側にゆるい上り坂の苑路がのびている。その先には屋根だけの四阿が建っているが、屋根は一部が傾いではまっている。撮影時期は不明だが、ゴシェがブローニュの庭師監督に就いた1936年頃、つまり畑の死後数年経ってからではないかと推測される。

ゴシェが言及していた「透かし彫りの引き戸のある茶室」と思われる建物でくつろぐ、エドモン男爵夫妻の写真が残っている(図2)。この写真は男爵の曾孫バンジャマンの妻アリアースが、ロンドンにあるロスチャイルド文書館に2005年に寄贈した資料に含まれている。裏面はコダック製の絵葉書仕立てになっている。夫妻晩年の様子がうかがえるところから、1920年代後半から1930年代前半の撮影と推定される。畑の手になるものだろうか、奥の円窓にはアジサイの花が活けてある。

同時に寄贈された資料のなかからは、庭師の姿をとらえた写真も見つかった(図3)。これまでに見た1890年代の写真に写っているのとは別の法被を着ているが、背恰好と顔つきから見て、男は間違いなく畑和助だ。今や口ひげを蓄え、ゆるやかな斜面に植えられた植物群の傍らに立っている。ごつごつした岩に日本産の草木を巧みに組み合わせて畑が作り上げた寄せ植えの

ようだ。この写真にも説明などは一切ついていないが、写っている情景とその出处から考えて、これもブローニュの日本庭園で撮影されたものと思われる⁸⁾。

ロスチャイルド文書館には、他にもブローニュの日本庭園を写したと推定される写真が10数点保管されている。エドモン男爵の遠縁にあたるロンドン・ロスチャイルド家のライオネル（1882–1942）が撮影した700余点のオートクロムのなかにある。これらの写真にも撮影場所・日時などは記されていないが、そのうち2点には、ゴシェの本に載っている写真と全く同じブローニュの庭園が写っている。ひとつは、先に示した四阿。もうひとつはフランス庭園だ。このことから、一連のオートクロム10数点も、同時期にブローニュで撮影されたと推定できる⁹⁾。そのなかから、日本式の建造物が写っているものを示そう（図4、図5、図6。なお、これらは裏焼きの可能性もある）。図4の写真では、瓦葺の日本家屋、石灯籠、焼物の台に置かれた盆栽、籠細工の花活け、垣根、竹を組んだ藤棚などが見える。図5は池か小川をまたぐ橋で、欄干は竹で組まれている。奥に家屋の屋根が見えるが、二重になった形状から、図4の写真に写っていた日本家屋のようだ。図6は水の上にかかる反橋で、欄干は太い竹でできている。四ツ目垣、藤棚、橋など、いずれの写真にもフランスでは貴重な竹を使った構築物が見られる。パリ市内のモンテスキウ邸の庭をとった写真にも、竹を組んだ小屋掛けが写っていたことが思い出される¹⁰⁾。また、先に引いたモンテスキウの回想録でも、ブローニュの日本庭園には「竹の小橋」があると書かれていた。畑は竹仕事を得意としていたのだろう。別の数点のオートクロムには、広々とした日本庭園を彩る花盛りのアジサイ、ユリ、スイレン、アヤメなどが写っているので、季節は初夏のようだ。撮影年は不明だが、ライオネルのオートクロムを詳しく調べたロスチャイルド文書館元館長のヴィクター・グレイは1909年頃と推定している¹¹⁾。フランスのリュミエール兄弟が実用化したオートクロムは、当時の最新式のカラー写真だった。これらの写真をカラーで眺めると、100年前に畑がこしらえた日本庭園の美しい姿が、生々しく蘇ってくる。

ロスチャイルド文書館にはさらに、ロッチルド邸の敷地全体を描いた詳細な図面も残されている。「A. ド・ロッチルド プローニュの城館」という表題が書かれたおよそ1.2m×1mの大きな一枚紙に、手書きの平面図がコピーされている。「A. ド・ロッチルド」は、1934年と35年にエドモン男爵とその妻が相次いで亡くなった後、プローニュの屋敷を継いだ長女のアレクサンドリーヌ（1884–1965）を指すと思われる。アレクサンドリーヌは、第二次大戦中の1940年5月にパリがナチスドイツに占領される直前英国に逃れたようだ。従って、図面は1930年代後半に作成されたと思われる。当時の写真と照合すると、細部まで実に正確に描かれていることがわかる。図面では左がほぼ北に当たり、大きな池の北側、池が深い入江となっている個所の下にJardin Japonais（日本庭園）と書かれている（図7）。畑が仕事をしていた3,000坪余りの日本庭園はここにあったのだ。ゴシェが述べていたように、いくつもの苑路がゆるやかに曲線を描いている。図のマークがついている個所は築山となっていて、頂には今日では建物の古い礎石が散在している。マークはゴシェが言及していた茶室か塔を示しているのだろう。マークの右（南）には、池にそそぐ流れが描かれている。現状でも幅1～2mの流水があり、岩を組んだ滝がいくつかかかっている。

畑がどれほど多くの日本産の草木をプローニュで育てていたかを伝える資料もある。ゴシェの父アルベールが遺した、プローニュの植物を記録したノートだ。ロスチャイルド文書館に保管されているそのコピーを開くと、草木の種類別に、植えた人又は種苗会社の名前と品種名、そして草木の特徴が記されている。たとえばPivoines ボタンの項には全部で169品種も並んでいるが、Hattaつまり畑が植えた品種は、Hakugan（白色、一重）、Kagura Jima（鮮やかな桃色、一重）、Michi Shiba（明るい桃色、一重）など実に136品種にのぼる。後述するように、日本にいる畑の実兄も庭師だった。また畑の出身地横浜には植物の輸出入を専門とする横濱植木株式会社があり、1889年に畑とともに渡仏した徳田佐一郎は、1910年代にその取締役を務めていた。日本産の草木を入手するとき、畑はこうした人脈も生かしていたのかもしれない。

このように畑和助はブローニュのエドモン・ド・ロッチルド邸で日本庭園の築庭に携わり、20年以上にわたって丹精込めてその充実と維持に努めた。3,000坪という規模からいっても、植物相の豊かさから見ても、海外の日本庭園としては瞠目に値する存在だったのである。しかしこの事実、日本では専門家にも全く知られていない。エドモン男爵はロスチャイルドの国際的なネットワークのなかで長年仕事をしており、内外の政財界の要人たちと幅広い交流があった。また男爵は美術品の蒐集家としても有名で、文化人とも交際が広がった。ロッチルドの庭園は、そうした各界の知人を招待した園遊会の舞台となっていたから、見事な日本庭園の存在はヨーロッパ社会のある階層の人々には知られていたと思われる¹²⁾。

1928年に畑が死去したのち、日本庭園を誰が手入れしていたのかはわからない。新たに日本人庭師が雇われたのか、それとも畑の仕事ぶりを見ていたフランス人庭師が後を継いだのか。前述のように、ゴシエの回想記によれば、エドモン夫妻の死後ブローニュを継いだアレクサンドリーヌは、第二次大戦中にナチスの迫害を逃れて英国に渡った。城館と庭はドイツ軍に接収され、占領軍に使われた。パリ解放後もロッチルドが戻ることはなかった。アメリカ軍の物資補給基地がおかれ、将校は城館に、兵卒は庭にテントを張って暮らした。とりわけ寒さの厳しかった1944年の冬に、茶室や塔や橋は暖房用の薪として燃やされたという。当然庭を手入れする人としてなく、荒廃が進んだ。こうした経緯をたどるうちに、ブローニュの城館と庭園に関する多くの資料は失われてしまったと思われる。大戦が終結し平和がもどった後も庭園の受難は続いた。病院や高速道路などの建設のために、庭が大きく削られたのだ。残った土地のうち、池を中心とする15ヘクタールはブローニュ＝ビヤンクール市のものとなった。しかし城館を含む東側と北側の土地は第三者に所有権が移ってしまった。その結果日本庭園は東西に二分され、築山のある西側の市立公園の部分は新たな日本庭園として整備が進められている。しかし東側は城館も庭も荒れ果てたまま放置され、到る所に植物が生い茂って暗く、エデンの園にも譬えられた昔日の面影はまったく見る影もない。

実はブローニュ＝ビヤンクールにはもうひとつ日本庭園がある。銀行家ア

ルベール・カーンが作ったもので、こちらは日本でもよく知られている。今日ではオ＝ド＝セヌ県の施設となっているこの庭園は、ロッチルド邸から1キロと離れていない。築庭は1890年代末から1909年の間、何回かにわたって行われたとされている。カーンとロッチルドは共にユダヤ人の資本家で、共に造園に並々ならぬ情熱を注ぎ、親交があった¹³⁾。先に見た通り1900年代初めには畑はブローニュで働いていたのだから、畑がカーンの日本庭園の造園や植栽に関与した可能性は否定できない。事実、アルベール・カーン博物館は、畑と思われる庭師の写真を所蔵している(図8)。これはカーンの庭園でかつて働いていたフランス人庭師のアルバムに収められていた写真で、撮影場所はカーン庭に現存する温室の階段だ。畑は今や豊かな口ひげを蓄え、髪を七三に分け、フランス人庭師と同じ作業着を身につけている。永年ロッチルド邸で働いてきたという自信だろうか、その落ち着いた雰囲気は貫禄すら感じさせる。染みのついた作業着姿という点を考えると、畑はカーンの日本庭園でも庭師の仕事をしていたと推測されるのだ。

また、モンテスキウも折にふれ、畑に盆栽の手入れや生け花づくりを頼んでいたようだ。例えば、「モンテスキウ文書」には、1913年6月にモンテスキウがエドモン男爵に、「7月2日火曜日の日中に小さな花かご飾りを作るために、畑を寄こしていただきたい」と依頼した手紙の控えが残されている¹⁴⁾。確かに、モンテスキウは回想録に、ヴェルサーユの屋敷でも畑が「この上なくエレガントな生け花を作ってくれた」と書いていた。恐らくロッチルド邸でも、畑は庭造りばかりでなく、城館の内部を飾る装花にも才能を発揮していたことだろう。四季折々、和風の意匠を凝らした作品で男爵夫妻や客人を楽しませていたのではないだろうか。

さらに、ブローニュにとどまらず、畑はエドモン男爵の別の所有地でも庭作りをしていた可能性がある。パリから26キロ東にあるアルマンヴィリエ Armainvilliers の土地は、その池の面積だけでも80ヘクタールもある広大なもので、1880年頃にエドモン男爵が建てたアングロノルマン様式の広大な城館がそびえていた。ここを訪れた日本人が記録を残している。1900年のパリ万博で日本の園芸展示の責任者を務めた福羽逸人¹⁵⁾が、この万博の

報告書で次のように述べている。「明治十年〔1878年〕ノ巴里萬國大博覽會ノ時出品シタル矮少〔ママ〕ノちやぼひば盆栽、佛國ノ富豪「エドモン、ロチルド」氏ノ手ニ移り、今尚生存スト雖モ其管理法ヲ知ラサルノミナラス、又其ノ天然ニ背スルヲ愛サル故、庭園中ニ栽植シ、今ハ大樹トナリ居レリ。是レ予カ親シク同氏ノ「アルマンヴィー」別墅ニ招待サレ目撃シタル處ナリ。¹⁶⁾」このように福羽はエドモン男爵のアルマンヴィリエの庭園で、1878年の万博に日本から出品された盆栽のチャボヒバが地植えされて大樹に育っているのを見ている。一方、1930年から36年までアルマンヴィリエで40人の庭師を率いて仕事をしていたマルセル・ゴシェは、池の畔に日本庭園があり、竹の橋がいくつもかかっている、幅広い品種の矮性の松柏類が育てられていた、と書いている¹⁷⁾。福羽が目にしたチャボヒバにとどまらず、多品種の矮性の松柏類がそろい、複数の竹橋があったことがわかる。先に見たように、畑が働いていたブローニュにも竹橋や各種の針葉樹が見られた。アルマンヴィリエの庭園も、畑が雇っていたエドモン男爵の所有地だったのだから、畑がその日本庭園の仕事にも遣わされた、と考えるのが自然だろう。なお、アルマンヴィリエの土地と城館は1980年代にモロッコ国王の所有となり、現在では外部の者は一切立ち入ることはできない。

ここで付言しておく、ジャポニズムの余波もあったのか、当時のロッチルド一族には日本庭園を持った人が少なくない。エドモン男爵の兄アルフォンス（1827-1905）は、アルマンヴィリエの北7キロほどのフェリエール Ferrières に広い屋敷を所有していた。19世紀半ばに建設された豪壮な城館を中心にして、125ヘクタールの広大なイギリス庭園が広がり、その一部に日本庭園が造られた。現在はパリ大学の施設として公開されており、遣水など日本庭園の遺構が見られる。アルマンヴィリエから僅かしか離れていないので、畑が関わった可能性もある。また、エドモン男爵の姪でモーリス・エフリュシと結婚したベアトリス（1864-1934）は、南仏ニース郊外のサン・ジャン＝カップ・フェラ Saint-Jean-Cap-Ferrat に7ヘクタールの土地を求め、1900年代にヴィラ・イル・ド・フランスという豪華な別荘を建てた。その庭の一部は当初から日本庭園になっていた。当時の図面や写真は残ってい

ないが、原状には、何らかの形でブローニュの庭の影響があったのかもしれない。1934年に全体がフランス学士院美術アカデミーに遺贈され、日本庭園は2002年から翌年にかけて日本の民間資金で一新された。さらに、ロンドン・ロスチャイルド家のライオネルの父レオポルド（1845–1917）も日本庭園を持っていた。場所はロンドン西部のガナーズベリ Gunnersbury で、1901年頃造られた。面積は0.4ヘクタールと広くない。今日では庭園全体が公開されており、日本庭園の池水の遺構が確認できる。

さて、これまで見てきた畑の姿を伝えてくれる8点のペン画や写真では、場所や時代は変わっても、いずれのカットでも畑は独りでポーズをとっていた。これらの図像からは、言葉の不自由な異国で、ただ独り黙々と草木の手入れにいそしんでいた孤独な職人の姿が想像される。しかし実際は、畑は意欲的にフランスの園芸関係者と交流を重ねていたようだ。そのように考えられる根拠は、まず、園芸愛好家団体の機関誌の記事にある。1827年に設立されたフランス全国園芸協会¹⁸⁾の1929年、つまり畑が死去した翌年の会報に、次のような記事が掲載されている。「《1929年4月11日の総会》総会は午後3時20分に開始された。[…] 会長は次の諸氏の逝去を報告した。L.A. デュラン氏（ヌワジー＝ル＝セック市、1914年入会）、ハタ氏（農事功労オフィシエ章受勲、1903年入会）、Ch. ジョリエ氏（レジオン・ドヌール五等勲章受勲、戦功章受勲、公教育章受勲、農事功労オフィシエ章受勲、1913年入会）、L. ランドリ氏（農事功労オフィシエ章受勲、1877年入会）¹⁹⁾」この記事にあるハタ氏とは畑和助ではないだろうか。ハタ氏が入会したとされる1903年の会報を開くと、入会の項に「ATAH、ブローニュの城館、ブローニュ＝シュル＝セヌ市（セヌ県）、ジャムラン、ドニ両氏の紹介による²⁰⁾」とある。他に畑らしき人物の名前は見当たらないので、このATAHはHATAの誤記に違いない。畑は当初ブローニュの城館の施設に住み込んで働いていたのだろう。2年後の会報には会員名簿が掲載されている。そこには「1903年入会－ハタ、ブローニュ市（セヌ県）、ガンベッタ街50番地²¹⁾」とある。1903年か04年に住み込みをやめ、市内に住居を借りたと思われる。ちなみに、畑が入会した際の紹介者2名を調べてみると、

ジャムラン（1887年入会）、ドニ（1891年入会）のいずれもブローニュ市に隣接するパリ16区に居住し、ドニについては農事功労シュヴァリエ章を受勲した終身会員、造園家と注記されている。ジャムランがどのような人物だったのかは分からないが、ドニは名のある造園家だったようだ。ロッチルドのもとで働くようになったころには、すでにこのような人物とも懇意になっていたこと、そして園芸愛好家団体のなかで交際を広げていたことが分かる²²⁾。

畑がブローニュの庭作りにとどまらず、フランスの園芸界で活動していたことを推測させる資料がもう1点ある。フランス国立図書館所蔵の「モンテスキウ文書」はこれまでも参照してきたが、こちらも同文書に収められている写真だ。台紙にはモンテスキウの秘書ピナールの手で、「日本人庭師ハタの展示」と付記されている。見事に咲きそろった鉢植えのキクが並び、植木鉢の間に名札が立っていて、そこには「W. HATA BOUTURES[挿し穂]」と書かれている（図9）。背景には金属柱で組まれた格子が見え、温室のようだ。格子の一部が外側に湾曲しているのがわかる。この特徴から見て、場所は1900年のパリ万博の際に建てられた園芸展示用の大温室と推定される。広さ2,800平方メートルの大温室2棟は「園芸宮」Palais de l'horticulture と呼ばれ、セヌ河に沿ってクール・ラ・レーヌに建てられた。1900年万博では、園芸部門はこの温室を主会場とし、時季にあったテーマごとに期間を決めて展示が行われる形式がとられた²³⁾。10月31日には菊花展も開催され、フランス内外から多くの菊愛好家が作品を出品した²⁴⁾。写真は万博のこの菊花展で撮影されたものかもしれない。あるいは同じ施設で別の年に開かれた展示会で撮られたのかもしれない。というのも、当時パリでは毎年秋に定期的に菊花展が開催されていたからだ。たとえば1906年の『田園生活』誌は、毎年恒例のパリ菊花展が24回目を迎えたことを報じている²⁵⁾。大輪の菊は19世紀半ばに日本からイギリスに運ばれ、欧米に広がったものだ。菊栽培の本家ともいえるべき日本出身の畑は、毎年丹精込めた力作を披露していたことだろう。この1枚の写真が物語るように、畑はロッチルドのお抱え庭師に甘んじることなく、腕を磨いてフランス内外の園芸家たちと競いあ

っていたと推測される。先の全国的な園芸協会での活動や、このような品評会での実績の積み重ねが、後年農事功労章の授勲という評価につながったと思われる。

畑は1928年8月28日、ブローニュの病院で亡くなった。63歳だった。3日後の31日、遺骸は市の南部セーヌ河のほとりにあるビヤンクール墓地に埋葬された。墓地の事務所が保管している記録によると、10年間の使用権がその後更新されることはなかった。畑が埋葬された区画は1970年以後使用されておらず、墓石などは残っていない。なお、日本と縁の深かったアルベール・カーンの墓も同じ墓地にある。

先に見た在仏日本大使の書簡では、1938年初めに畑の未亡人が遺産相続の手続きを進めていたことがわかる。今から70年以上も昔のことになるが、これについてはオ＝ド＝セーヌ県文書保管室に記録が残っている。それによると、妻がいたにもかかわらず、畑が借りていたレスト街52番地のアパートマンに遺された家財は、畑が亡くなった翌年の3月2日と8日に裁判所書記官の手によって競売にかけられた。マットレスや自転車は2点ずつ競売リストにあるから、妻が使っていたものも含めてすべて競売に付されたと思われる。家具、食器、工芸品など80項目ほどの売り上げは8,956フランだった。この他に、畑の銀行預金と株式・債券に関する記録も見つかった。預金が18,745フラン。北部鉄道会社、ロシア国債など10数種類の株や債券は、なぜか1935年8月に現金化され7,093フラン。これらの合計額から相続税などが差し引かれ、残りが未亡人の手に渡されたと思われる。競売の売り上げ、預金、株・債券の合計額34,794フランは、国立経済統計研究所が発表している1938年の数値で換算すると、今日の16,323ユーロに相当する。畑が死去した翌年の1929年秋には大恐慌が始まって、株式は大きく値を下げていた。畑の生前には、株の評価はずっと高かったに違いない。

畑はエドモン男爵のブローニュの庭園というこの上なく恵まれた仕事の舞台を手に入れ、思う存分、自由に腕を振るうことができた。そして晩年には、比較的ゆとりのある生活を送っていたと思われる。では、家庭的にはどうだ

ったのだろうか？ 畑の未亡人ベルトの出生証書を調べると、畑が他界した翌年 1929 年 9 月にパリ 10 区で家具職人と再婚していることがわかる。ベルトは畑と暮らしていた住居の家財を引き継がず、家財は競売にかけられた。こうしたことから考えると、ベルトは当時何らかの理由で、畑とは音信不通になっていたのかもしれない。その後畑の死亡を知り、ベルトは再婚を果たしたのだろう。遺産を相続した後も、ベルトが前夫の墓の使用権を更新した形跡はない。

当時のパリ、特に 1920 年代のパリには、画家や彫刻家をはじめとして数百人の日本人が住んでいた。そうした人のなかには、帰国後、パリの思い出を書き綴って出版した者も少なくない。しかし、今までのところ、それらの著作のなかに、畑を見出すことはできない。詩人の金子光晴がフランスで出会った日本人庭師の話を書いているが、畑とは認めがたい²⁶⁾。エドモン・ド・ロッチルドを識っていた日本人、たとえば豪商薩摩治兵衛の息子薩摩治郎八などは、畑について話くらいは聞いたことがあったかもしれない。

畑和助は、日本にいる両親や兄弟に手紙や写真を送っていたことだろう。縁者のもとには、和助に関する何かが伝えられている可能性もある。東京の外務省外交史料館と横浜市鶴見区役所に保管されている資料から、畑和助の父は仲次郎といい、和助には金蔵という兄のいたことが分かる。幸い金蔵の高齢のご子息から直接お話を伺うことができた。しかし和助という渡仏した叔父がいたことは、まったくご存じなかった。もちろん、和助に関わる品も何も伝えられてはいなかった。ただ、兄の金蔵も庭師で、明治 25 年（1892 年）に鶴見に造られた浅野長勲の広大な別荘、通称安芸様屋敷で庭師として働いていたということだった。また、鶴見神社の宮司を務めた黒川莊三（1846–1936）が書き残した手記『千草』には、畑和助の父祖のことが次のように書かれている。「鶴見村下町畑庄右衛門二男畑金次郎ナル者、天王川岸傍ラヘ文政年間分家シ畑角右衛門ト云植木職ヲナス。其妻ナル者勉強者ニテ、[…] 或時渡船ヲ買求、天保年間ヨリ之レヲ作場渡トシテ初ム衆人出入ニ大ニ悦フ。[…] 其養子仲次郎ナル者、実体者ニテ、嘉永安政年間亜米利加船出来ニ付、海道ヲ多ク通行ニヨリ渡船繁昌ス。尚其頃文久、慶応年間

農業モ出精シ家ヲ富マス。其妻女ユキ子渡船ヲナス。長男金蔵アリ²⁷⁾」。この文章から、兄金蔵のみならず、和助の祖父も植木職人だったことが分かる。鶴見の寺にある畑家の墓所の古い石に、庭師が使う植木鉢の文様が彫りこまれているのはこのためだ。また次の逸話は、和助の父仲次郎が進取的だったことを伝えている。「文久三癸亥年三月鶴見村千十番地畑仲次郎横浜元町式丁目川岸八百屋某ヨリ右種子〔キャベツ菜〕一握リヲ試作ノ依頼ヲ受け春分後ニ其年ハ培養不良、後年寒暖ノ氣候ヲ計リ漸ク良好ヲ得ルニ至レリ、今日世間ニ賞セラレ現時一般ノ単ニ野菜ノ部分ハ衆人ヲ利益ス。明治十八年七月十五日日本村ノ戸長ヨリ賞状送ラル²⁸⁾」。祖父と兄が植木職、父が農業を営むという環境のなかで、和助も恐らく早くから草木の扱いに親しみ、盆栽の小品から造園全般に関する幅広い知識と技術を習い覚えていったのだろう。万博出展を準備していた笠原恵は、そうした総合的な庭師としての技量と草木の扱いの才腕を評価して、23歳の和助を抜擢したと考えられる。こうして、旺盛な冒険心にあふれる若者は、はるばる海を越えフランスに渡り、腕一本で人生の道を切りひらき、異国の地に根を下ろしたのだった。

以上見てきたように、畑和助に関する文書や写真は、日本、フランス、イギリスに散在している。ロベール・ド・モンテスキウ、グレフル夫人、ユーグ・クラフト、エドモン・ド・ロッチルド、アルベール・カーンという当時の有力者のもとで確かな形のある仕事を残した畑だったが、死後はほとんど忘れられてしまった。ただ、畑和助の名を繰り返し書きとめ、後世に伝えようと努めた者がひとりだけいた。畑を見出し、見守りつづけたモンテスキウだ。先に引用した随筆や回想録のみならず、自作の詩のなかにも畑の名を刻んでいる。詩集『蝙蝠』に収められた「聖フィアクル」というヴェルサーユの庭園をうたった詩の末尾で。「日本が代表として評価する／あのハタ・ワスケにならい／私は麝香に薫る一輪の百合を育てよう／貪欲な牡丹の傍らで、／そして私は望む／あなたが悲しみに沈んでいる日にはきっと／あなたの庭師たちの頭^{かしら}に／あの花師を思い出させよと命じてほしい。²⁹⁾」

註

- 1) Robert de Montesquiou, *Les Pas effacés*, Emile-Paul, 1923, t. II, p. 209. ロッチルド Rothschild は英語式に読めばロスチャイルド。エドモン (1845–1934) は、パリ・ロッチルド家を興したジェイムズの四男で、東部鉄道会社などの経営者。シオニズムの支援者、美術品の蒐集家 (フランス学士院美術アカデミー会員) としても知られる。
- 2) N.a.fr. 15040, f. 58.
- 3) これは日本人の名前のようだ。畑の出身地である横浜で明治時代に活躍した弁護士に藤原吉郎 (1869–?) がいる。依頼人には外国人もいたという (『横濱成功名譽鑑』横濱商況新報社、明治 43、p. 793; 『日本法曹界人物事典』第 7 巻、ゆまに書房、1996、p. 131)。1869 年生まれなので、1911 年には立会人のフジワラと同じ 42 歳だった。また、外務省外交史料館所蔵の「明治 43 年 8 月分外国旅券下附表神奈川縣庁」を見ると、8 月 17 日に、「横濱市弁天通 6 ノ 110」の「藤原吉郎」に「佛國・露國」を渡航先とし、「法律事務用」を目的として旅券が発給されている。一方、1925 年から 33 年にパリで発行されていた日本語新聞『巴里週報』の購読者名簿に藤原吉郎 (セヌ県ブワ = コロンブ市マリ・ロール街 10 番地) の名前がある (『巴里の日本語新聞—『巴里週報』I』柏書房、2009、p. 278)。
- 4) 同市文書保管室の資料によると、レスト街 52 番地の共同住宅は、畑が結婚したのと同じ 1911 年に建築された。6 階建てで 11 戸のアパートマンがあり、今日でも住宅として使われている。外観からは 100 年も経っているとは見えないほど、良く維持されている。
- 5) J.Gérôme, « Visite de la Société au parc de M. de Rothschild et aux cultures de M. Magne, à Boulogne-sur-Seine », *Revue des sciences naturelles appliquées*, 1904, pp. 309–310 参照。なお、庭師長のショヴァンは、先に見たように、1911 年には畑の結婚の立会人になった。
- 6) *Op. cit.*, p. 209.
- 7) Marcel Gaucher, *Les Rothschild côté jardins*, Arts & systèmes, 2000, pp. 98–101 参照。なお、ゴシエは畑の名を Hatta と綴っている。父アルベールがそのように書いていたためと思われる。このため、ゴシエの記述にもとづいたブローニュ = ビヤンクール市のホームページなどでも Hatta と表記されている。またゴシエは、「1900 年のパリ万博で日本の盆栽に惹かれたエドモン男爵が、展示のために来ていた畑を雇い入れた」と書いているが、この伝聞による記述は事実と異なる。
- 8) この写真の鮮明な画像は、ロスチャイルド文書館のサイトで見ることが

できる (<http://www.rothschildarchive.org/ib/articles/AR2009Director's%20Review.pdf>)。

- 9) これらのオートクロムはいずれも 2 枚 1 組になっていて、ステレオカメラで撮影されたことが分かる。
- 10) 『慶應義塾大学日記紀要フランス語フランス文学』 No49-50, 2009, p. 207, 図 3 参照。
- 11) *The Colours of another age, The Rothschild Autochromes 1908-1912*, The Rothschild Archive, 2007, p. 54.
- 12) たとえばボニ・ド・カステラス侯爵は、1914 年 6 月 28 日、ロンシャン競馬のグランプリの当日、エドモン男爵のブローニュの庭園でガーデンパーティーが開かれ、その折に日本庭園を見たことを回想している (Boni de Castellane, *L'Art d'être pauvre*, G.Crès, 1925, p. 172 参照)。
- 13) たとえば『アルペール・カーン・コレクション』NHK 出版、2009、p. 311 参照。
- 14) N.a.fr.15156, f.174.
- 15) 福羽逸人 (1856-1921) は農商務省から派遣されて 1886 年から 89 年までフランスとドイツに留学し、帰国後は西欧の園芸技法を日本に導入しつつ改良に努め、新宿御苑や農林学校で後進の指導にあたり、日本における近代園芸の基礎を築いたとされる。1890 年にフランス農業省から農事功労章を、1901 年にはフランス政府からレジオン・ドヌール勲章を受けた (『福羽逸人回顧録 (解説編)』(財) 国民公園協会新宿御苑、2006 参照)。また、畑も入会したフランス全国園芸協会の海外通信会員でもあった。畑とは 1889 年のパリ万博以来の旧知だったと思われる。
- 16) 『千九百年巴里萬國博覧會臨時博覧會事務局報告 (下)』農商務省、明治 35、p. 326。
- 17) Marcel Gaucher, *op. cit.*, p. 121.
- 18) フランス国立園芸協会と訳されることが多いが、今日この団体は国立ではない。
- 19) *Bulletin mensuel de la Société Nationale d'Horticulture de France*, janvier 1929, p. 212.
- 20) *Journal de la Société Nationale d'Horticulture de France*, janvier 1903, p. 709. 当時は入会には会員 2 名の紹介が必要だった。
- 21) *Ibid.*, janvier 1905, p. 106. 畑の結婚立会人ヴィクトール・ショヴァンの項には、「1884 年入会ーロッチルド兄弟邸庭師長、ブローニュ市 (セーヌ県)」と記され、農事功労シュヴァリエ章受勲のマークがついている。ちなみに、畑について書いていたマルセル・ゴシエは、戦後長年にわた

って同協会の幹事長などの役員を務めた。

- 22) 畑はドニやジャムランとどのようにして知り合いになったのだろうか？1889年のパリ万博で日本庭園を作った時かもしれない。この二人も日本の園芸に興味を抱き、盆栽やユリの球根を買って求めたのではないだろうか。ちなみに、万博で日本庭園が設けられたトロカデロの園芸展示会場は、二人が住んでいたパリ16区にあった。
- 23) *Figaro illustré, l'exposition de 1900*, septembre 1900, pp. 184–186 参照。
- 24) *Journal de la Société Nationale d'Horticulture de France*, janvier 1900, p. 878. この菊花展では、福羽逸人が指揮し、市川之雄と相田春五郎がフランスで苦労して育成した大作菊が一等賞を獲得した（白幡洋三郎「菊と万国博」、『万国博覧会の研究』思文閣出版、1986、pp. 126–127）。
- 25) *La Vie à la campagne*, 1^{er} décembre 1906, p. 134.
- 26) 『絶望の精神史』光文社、1965、pp. 117–118; 『ねむれ巴里』中央公論社、1976、p. 291。
- 27) 『千草』千草刊行委員会、1994、p. 41。下線引用者。
- 28) 同書、p. 21。下線引用者。
- 29) *Les Chauves-souris*, Georges Richard, 1907, pp. 315–316. 聖フィアクルは、庭師、園芸家の守護聖人。なお、マルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』には、境遇や言葉遣いの特徴が1890年代の畑と酷似するひとりの使用人の挿話が盛り込まれている（拙著 *Le Japonisme dans la vie et l'œuvre de Marcel Proust*, Keio University Press, 2003, pp. 66–67 参照）。畑が働いたフランクリン街のモンテスキウ邸、ヴェルサーユのモンテスキウ邸、クラフトの「緑の里」のいずれの日本庭園も、ブルーストは1890年代に訪ねたことがあり、モンテスキウから日本人庭師、つまり畑和助の話を聞いていた。

図版

- 図1. Marcel Gaucher, *Les Rothschild côté jardins*, Arts & systèmes, 2000より。
- 図2. « Baron and Baroness Edmond de Rothschild », The Rothschild Archive.
- 図3. « A Japanese gardener », The Rothschild Archive.
- 図4. Autochrome by Lionel de Rothschild, no.91, The Rothschild Archive.
- 図5. Autochrome by Lionel de Rothschild, no.94, The Rothschild Archive.
- 図6. Autochrome by Lionel de Rothschild, no.89, The Rothschild Archive.
- 図7. « Madame A. de Rothschild, Château de Boulogne » (部分),

The Rothschild Archive.

- 図 8. « Un jardinier japonais dans la serre des jardins d'Albert Kahn à Boulogne », Fonds Quigrat, Z 688-1.
(Cliché Musée Albert-Kahn, Département des Hauts-de-Seine)
- 図 9. « Exposition de Hata, le jardinier japonais », N.a.fr.15040, f.61.
(Cliché Bibliothèque nationale de France, Paris)

謝辞

資料調査を進めるうえで、これまで多くの方々からご協力をいただいた。
お名前を記して、感謝の微意を表す次第である。(ご所属は当時)

フランスワーズ・ブラダリエ＝アルゲー氏

(プローニュ＝ビヤンクール市文書保管室)

フランスワーズ・ベドゥサック氏

(プローニュ＝ビヤンクール市文書保管室)

スイゴレーヌ・ティヴォレ氏 (アルペール・カーン博物館)

アンヌ＝ソフィ・ベルトン氏 (フランス全国園芸協会図書館)

フレデリック・ドゥワ氏 (オー＝ド＝セーヌ県文書保管室)

ヴィクター・グレイ氏 (ロスチャイルド文書館)

パープラ・ラパート氏 (ロスチャイルド文書館)

ジャン＝ピエール・アブリアル氏 (慶應義塾大学)

齋藤美枝氏 (鶴見歴史の会)

久野淳一氏 (横浜市中心図書館)

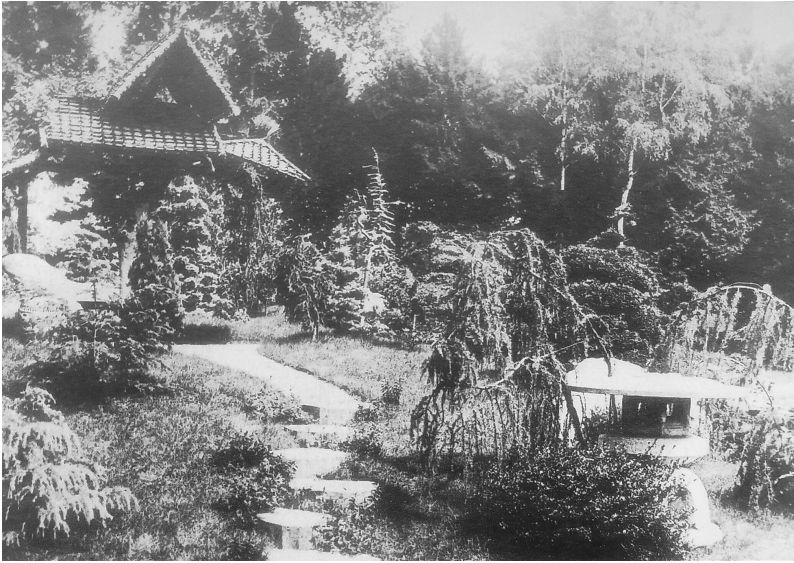


図 1

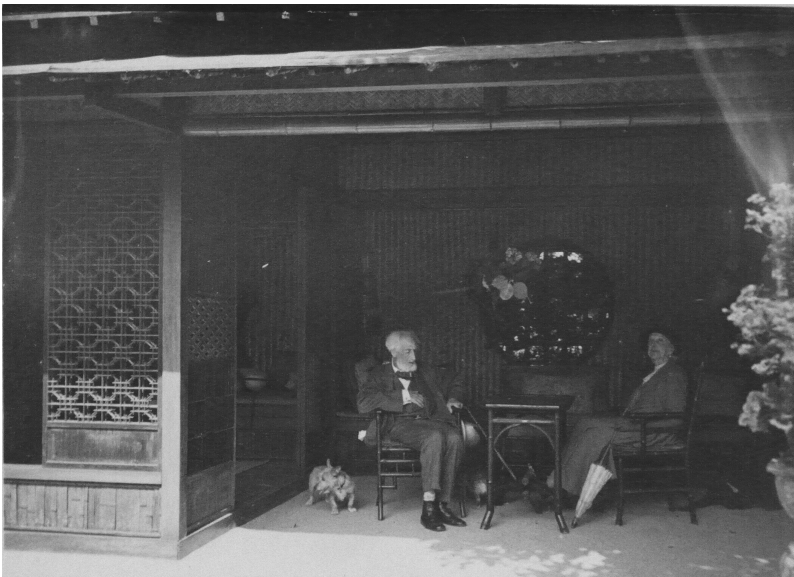


図 2



图 3

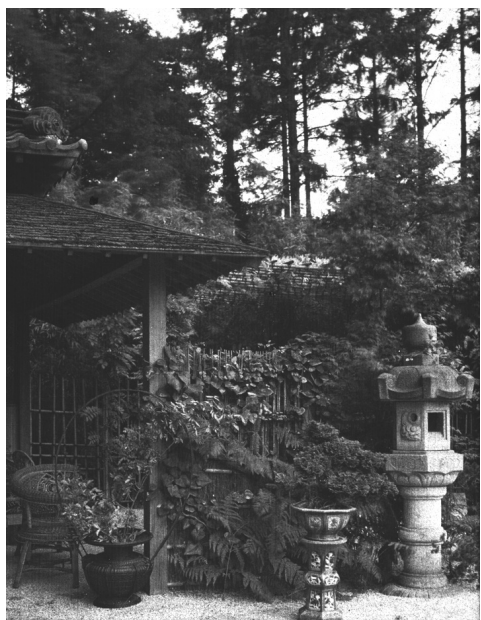


图 4

図5



図6

图 7

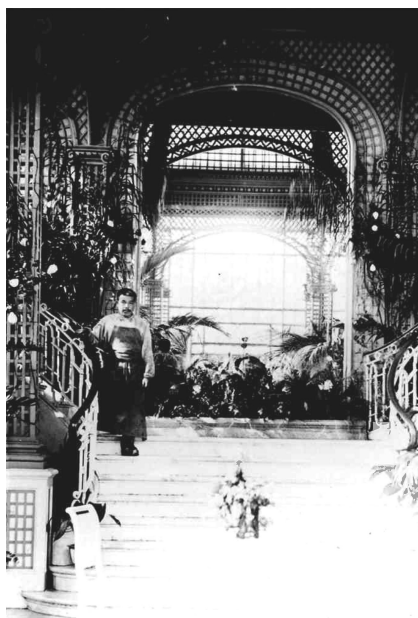
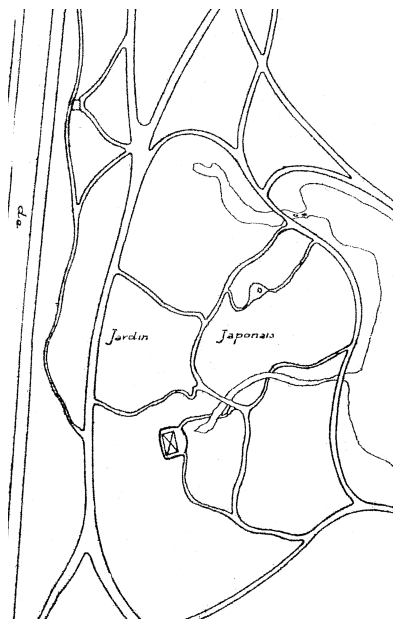


图 8

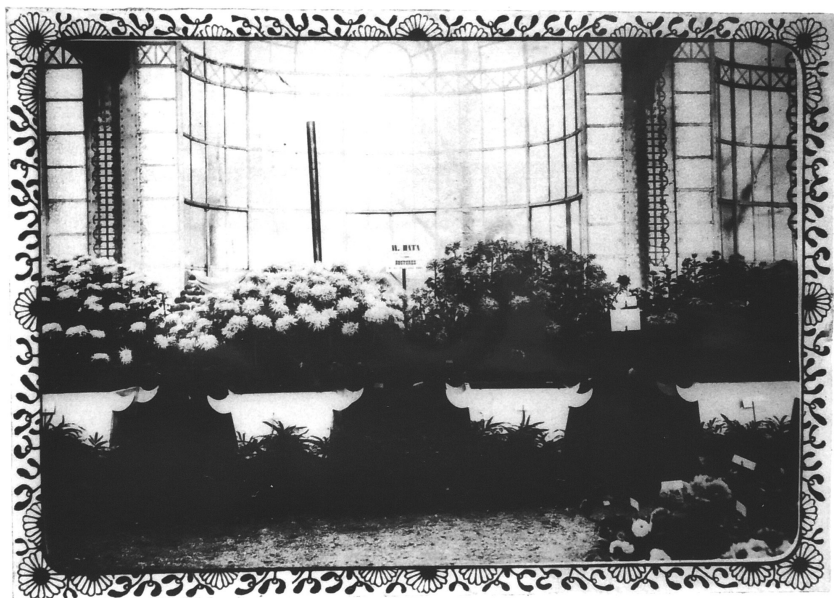


図 9 (BnF)

Un jardinier japonais en France

— sur les traces de HATA Wasuke (seconde et dernière partie)

SUZUKI Junji

D'après les mémoires de Robert de Montesquiou, celui-ci a présenté Hata Wasuke au baron Edmond de Rothschild pour qu'il crée un jardin japonais dans le parc du château du baron à Boulogne-sur-Seine. La Bibliothèque nationale de France conserve en effet une lettre du baron remerciant Montesquiou d'avoir retrouvé le jardinier japonais. C'était sans doute entre 1895 et 1900.

Une lettre de l'ambassadeur du Japon en France, datée du 15 février 1938 et adressée au ministre japonais des affaires étrangères, est conservée au Bureau des documents diplomatiques à Tokyo. Elle nous apprend que Hata est arrivé à Marseille le 23 mars 1889, a été engagé à Boulogne chez Rothschild, s'est marié avec une Française en 1911, est mort le 28 août 1928 à Boulogne, et que sa veuve demandait à l'ambassade du Japon de délivrer un document d'état civil de Hata pour hériter de ses biens. L'acte de mariage et l'acte de décès de Hata conservés à la mairie de Boulogne-Billancourt attestent son mariage et sa mort. Hata a été enterré au cimetière de Billancourt avec une concession pour dix ans qui n'a pas été renouvelée.

Bien que peu nombreux, plusieurs documents nous aident à nous représenter le jardin nippon réalisé par Hata à Boulogne : un article de J. Gérome paru en 1904 dans la *Revue des sciences appliquées*, les mémoires de Montesquiou, *Les Rothschild côté jardins* de Marcel Gaucher (régisseur du parc de Boulogne entre 1936 et 1939) comprenant une photographie du jardin japonais en question, la photocopie d'un cahier d'Albert Gaucher (régisseur

du parc de Boulogne à partir de 1924) concernant des plantes introduites au parc ainsi qu'une douzaine d'autochromes prises par Lionel de Rothschild vers 1909 et conservées aujourd'hui dans la Rothschild Archive à Londres. Selon ces documents, ce jardin japonais à Boulogne ayant une surface d'un hectare possédait une magnifique collection de végétaux d'origine japonaise et comprenait divers éléments authentiques de décor : pavillons, kiosques, pagodes, portiques, barrières de bambou, treilles, lanternes de pierre, ponts, rivière, bonsaïs, volière et animaux. D'après Marcel Gaucher, le jardin qu'a créé Hata et dont il s'est occupé pendant plus de vingt ans offrait, lorsqu'il était en pleine floraison en mai-juin, une vision édénique. La Rothschild Archive possède également une photographie de Hata dans ce jardin, une autre du baron et de son épouse dans un pavillon japonais ainsi qu'un grand plan détaillé du parc de Boulogne fait sans doute dans la dernière moitié des années 1930. L'existence de ce beau et vaste jardin japonais est complètement inconnue dans le pays natal de son créateur.

Une photographie d'un jardinier japonais, sans aucun doute Hata, prise dans le palmarium du jardin d'Albert Kahn à Boulogne et conservée au musée Albert-Kahn, nous permet de penser que Hata a également travaillé dans le jardin nippon de cet ami du baron Edmond.

Il est fort probable que Hata a travaillé aussi dans le domaine d'Armainvilliers (Seine-et-Marne) du baron Edmond pour aménager un jardin japonais lacustre. Plusieurs Rothschild de l'époque avaient d'ailleurs un jardin nippon: Alphonse, frère aîné d'Edmond, dans son domaine de Ferrières (Seine-et-Marne), Béatrice d'Ephrussi, nièce d'Edmond, à Saint-Jean-Cap-Ferrat près de Nice, et Leopold à Gunnersbury dans Londres.

Les bulletins de la Société nationale d'Horticulture de France nous apprennent que Hata s'est inscrit à cette société en 1903 et qu'il a été nommé officier du Mérite agricole. Une photographie conservée à la Bibliothèque nationale de France montre les chrysanthèmes en fleurs cultivés par Hata

et présentés dans le Palais de l'horticulture construit lors de l'exposition universelle de 1900. Cette photographie nous permet de penser que, ne se contentant pas d'être jardinier chez Rothschild, Hata présentait ses chrysanthèmes dans des expositions.

Le département des Hauts-de-Seine conserve les documents concernant la succession des biens de Hata par sa veuve, seule héritière remariée : le résultat de la vente des articles laissés après sa mort dans son appartement et une liste de biens financiers.

Nous avons pu interviewer le neveu de Wasuke habitant à Yokohama au Japon mais ignorant avoir un oncle qui était parti pour la France. Aucun objet évoquant Wasuke ne semble se trouver chez les Hata au Japon. Son grand-père et son frère aîné étaient en fait eux aussi jardiniers.

Nous citons à la fin de l'article un poème de Montesquiou chantant « Hata Wasuké dont le Japon se recommande ».

Remerciements

Nous exprimons toute notre gratitude aux personnes suivantes qui nous ont accordé leur aide pour que nous nous documentions. M^{mes} et MM. Françoise Pradalié-Argoud (Service Archives, ville de Boulogne-Billancourt), Françoise Bédoussac (Service Archives, ville de Boulogne-Billancourt), Sigolène Tivolle (Musée Albert-Kahn), Anne-Sophie Berthon (Bibliothèque de la Société nationale d'Horticulture de France), Frédéric Douat (Archives départementales des Hauts-de-Seine), Victor Gray (Rothschild Archive), Barbra Ruperto (Rothschild Archive), Jean-Pierre Abrial (Université Keio), Saito Mie (Société d'histoire de Tsurumi), Kuno Jun'ichi (Bibliothèque centrale municipale de Yokohama).